【史料１】

●兵営敷地寄附金課当

（一）課当額と年賦期限

課当額と其年限に就きては幾回か之れを報ぜしも更にその巨細を語らんに仮に寄附金総額をを金十六万七千三百三十八円とし内郡尚武会より金三万円の寄附を仰ぎ尚ほ旧松江、広瀬、母里三藩主より金二万円の寄附を得るものとし残額金十一万七千三百三十八円を市民の負担とするに在り尤も内、五万一円は所謂市内有力者廿五人の特別負担となし再差引金六万七千三百三十七円をば右二十五人を除けるものに課当せんとするに在り

（二）特別負担と其人名

特別負担といふ以上は一般よりも特別に比較的多額を負担するものにして市民の感謝に値ひすべし其金額は前述する如く金五万壱円即ち廿五人、壱人平均弐千円強なりといふべし即ち如左

一等　２，２５０円　佐藤喜八郎
二等　１，３００円　岡崎運兵衛
三等　１，１００円　森脇甚右衛門　三島佐次右衛門　大島新四郎
四等　　９００円　織原万次郎　桑原羊次郎　尾原佐七
五等　　６００円　金沢伝十郎　山内佐助　福村弥一郎　古津元市　中島虎之助　佐藤弥三郎
六等　　４５０円　清原宗太郎　田中助次郎　山本権七　山口卯兵衛　川上弥太郎　河内忠助
七等　　４００円　森脇義兵衛　森山祥蔵　中西熊三郎　持田保一郎　森脇佐平
計　１７，８５０円

（三）各町と負担の割合

左れば廿五人の負担を除きたる各町の負担額は実に左の如し

町名	国税特別所得税負担	戸数負担	合計
雑賀	５，５２８	７６８	６，２９６
殿町	４，８２６	４７０	５，２９６
天神	４，６６５	１５３	４，８１８
白湯本町	４、１７４	６８	４，２４２
末次本町	４，０２２	１００	４，１２２
北堀	２，９８５	３１４	３，２９９
大字松江分	２，６１０	４７１	３，０８１
母衣	２，８５１	２１６	３，０６７
石橋	２，４２６	３０６	２，７３２
竪町	２，４０４	１６４	２，５６８

（注）能川が合計額上位１０ヶ町のみを抽出して記している。

（『山陰新聞』1907年8月19日）

【史料２】

●兵営道路の悶着

八束郡古志原に於ける松江聯隊へ通ずる県道に関しては春来二派に分れ即ち雑賀本町派と津田街道派との二派にして前者は本町より同五六丁の間を新開して駒返道に接続せんとするもの後者は竪町より津田街道に折れて従来の駒返道を其まゝ応用し更に之れを取り拡げんとするもの而して前者は主として三島和一郎氏の主張に係り岡崎運兵衛氏を筆頭として一味の連判状に署名して頻りに其筋へ運動を試みつゝあり後者は長田惣太郎氏熱心これが為めに奔走中にして近頃は地平線下に暗流滔々として頓て公々然鎬を削るに至るべし

（『山陰新聞』1908年7月7日）

●兵営道路意見書（市会具申）

松江市会は一昨日を以て突嗟の間に兵営道路に就き県知事に意見書を提出すべく決定せしことは昨紙に報ずるものゝ如し而して県参事会の議決なるものとは正反対にして其意見書なりといふものは左の如し

我松江市に旅団新設の事決するや県当局者は必要上松江市より兵営に達する県道を新設せんため夙に正比二線を調査し本線は津田街道より現在の馬背線を改修せんとし比較線は雑賀本町より同字七丁目を経て松江分字田中に於て馬背線に合し以て兵営に達するものとし以て今期議会に提案する所あらんとすと依て本市は市将来の利害得喪を考察するに雑賀本町線が本市の幹線に最も近接し随て市形の整正を得本市囲部の利益上平均を持し将来の発展に資する所あるのみならす其道路敷地買収費と地上物件移転料等よりするも津田街道線に比して優に千円の経費を減少せしむるを得へく且本道路にして一たひ竣成せは必然の結果として現在の馬背線と相待ち二線併用の便あり其利更に大ならすや茲に本市会は大多数を以て本市の公益上雑賀本町線を最適当なりと確定し市制第三十三條に依り意見を具申致候也

明治四十一年十一月十五日

松江市会議長　　高橋千代司

島根県知事丸山重俊殿

（『山陰新聞』1908年11月17日）

【史料３】

●明治三十七八年戦役記念日設定ノ件（抄）

明治三十七八年戦役記念日設定趣意書（案）

故ニ今回ノ大戦役ノ為ニハ特ニ陸軍全般ニ亘ル記念日ヲ定メ本戦役ニ干与セル者ハ勿論後来陸軍ニ従事スル者ヲシテ本戦役ノ偉績ヲ懐想シ祝意ヲ表セシムルヲ最良ノ手段ト認ム是レ独リ戦没者ノ英霊ヲ慰籍スルノミナラス軍隊ノ士気ヲ振起シ精神上多大ノ裨益ヲ収得シ猶後世ニ至ルマテ能ク本戦役ノ洪勲ヲ欽仰セシムルコトヲ得ヘシ奉天ノ大会戦ハ今回ノ戦役中我軍隊ノ大部分之ニ参与シ各軍ニ関係アル戦闘ニシテ其三月十日ハ戦況最モ良好ナリシ日トス是レ特ニ同日ヲ選ヒ陸軍全般ニ亘ル本戦役ノ記念日ト定メタル所以ナリ

年　　月　　日

（陸軍省『満大日記　明治三九年一月』C03026916400）

※陸軍次官から陸軍一般に宛てて発信された通牒に添付された趣意書の文案。

【史料４】

●陸軍紀念日　奉天模擬戦

既記の如く昨十日陸軍記念日に際し午前十時より歩兵第六十三聯隊にては八束郡大庭村大字山代茶臼山に奉天大会戦の模擬戦を挙行せり

……（中略）……

当日は朝来雨模様なりしも戦を終わる迄は降雨とならざりしかば市内県立各学校及近村各小学校生徒は此記念日を祝して休業し職員に引率せられて射的場北面及び東方の山畑に雲屯蟻集して見物し近村の老若男女も山の周囲を取り囲みて参観せしが聯隊よりは説明者四名を出して懇ろに戦状を説明せしめしため一同は大いに満足せり

（『山陰新聞』1911年3月11日）

●市街戦を随所に演じ　松江城山を包囲す

松江の陸軍記念日は折悪しく雨に明けた、思ひ起す二十五年前の奉天大会戦を目のあたり出現すべく十日午前九時から、松江城山攻防演習が挙行された、松江六三聯隊の二個大隊及機関銃隊、これに松江市内各中等学校、青訓生約一大隊参加、攻防両軍に分れ、守備軍には歩砲隊、攻撃軍には戦車隊（模擬）が配属され、壮烈な市街戦が随所に演ぜられた、幸運にも演習開始の頃から雨漸く晴れ、城山は早くも演習見物の群衆で黒山を築き、附属□前広場から殿町一帯、大橋川、和田見附近まで軍隊、学生軍で埋まるの大雑沓を呈し、銃砲火盛んに轟く中を小学生の旗□列隊は□旗を先頭に、小旭日旗を手に『奉天戦』の軍歌を高唱して練り歩く、殿町（元郡役所跡）の救護班では市内女学生が篤志看護婦隊を組織して傷病兵の救恤に甲斐々々しい働きを見せ、午前十時頃には城山包囲の攻撃軍が加つた松江全市民が二の丸広場に押寄せるの大盛観を呈した

（『山陰新聞』1930年3月11日）

【史料５】

●社論「陸軍記念日」

元来所謂軍国主義と所謂尚武的精神とは、形に於いて相似たる□あるが如きも、而も全然其の実質を異にせずんばあらず。軍国主義や攻略侵襲を以て不断の方針とし、其の武備を修む。尚武的精神に至つては、其の目的決して攻略侵襲にあらず、以て自ら守り自ら備へ自から強うするに在るのみ。……（中略）……吾人茲に第十五回陸軍記念日を迎へて、我国の現情に顧、竊に痛歎に禁ぜざる者なき能はざるなり。冀はくば国民と共に、三十七八年戦役に光輝ある終局を与へたる当年の当日を回想し、更に其感激を新にして大ひに尚武的精神を鼓舞する所あらん。一言感懐を録する者、敢て弁を好むにあらざるなり。

（『山陰新聞』1920年3月10日）

【史料６】

●陸軍記念日に若き人々へ想出を語る－杉田生

今から二十三年の昔其頃自分は中学の一年生であつた、東洋平和の為に暴虐なる強露に対して取つて立つた日本の津々浦々海には数回の旅順閉塞が企てられ陸には鴨緑江を挟んで両軍対峙してゐた其の模様を報じて幾度か出る号外の音それから次から次へと召集されて行く町の人達の群れ何処も此処も万歳と歓呼と悲壮な袂別辞とが織なされて大人も子供も男も女も唯戦争と言ふ一年に燃立つ様な意気を挙げてゐた、今から思へば本当に涙ぐましいまでの挙国一致と忠誠報国が表現されてゐた　（『山陰新聞』1928年3月10日）

●連続的な凄壮な音－暴風襲来を思はす銃砲の音－

奉天戦に喇叭手として第一線に活躍す　今は昔思出を語る武田金市氏

一番に苦しいのは敵弾がブスツ ／＼ と前に落ちて土をはねる時で、頗る気味悪く頭の上をビユーツ ／＼ と通るときは何でもない、此前に落ちて来るのは敵が着弾距離を正確に計つた時であるから非常に危険だ此時は夫よりズツト後に退くか又はズツト前進するかでなければならぬがコヽが日本魂の発揮する処で一歩も退くと言ふことをしない、そんな時に中隊長は直に前進命令を発する或は幾多の犠牲を生ずるも唯だ前進あるのみと云つたやうなやり方である、これが抑我の勝利を得た所以と思はれます

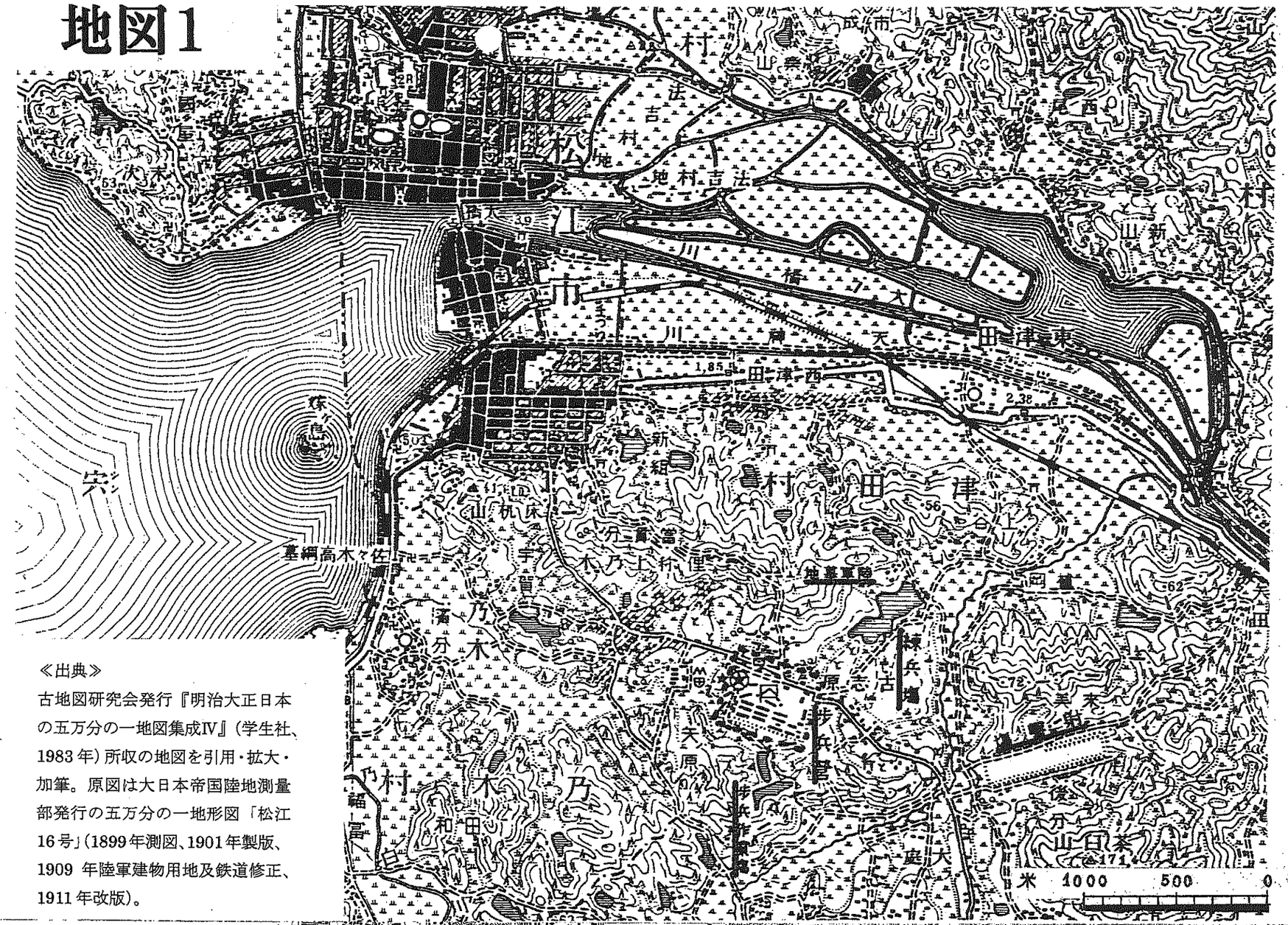
（『山陰新聞』1930年3月10日）

●偲べ前線を－老勇士県会議員談－

簸川郡田岐村長を勤める県会議員の木村弥一氏は既報の如く日露戦争に右足を君国に捧げた傷痍の勇士だかけふの記念すべき日に語る

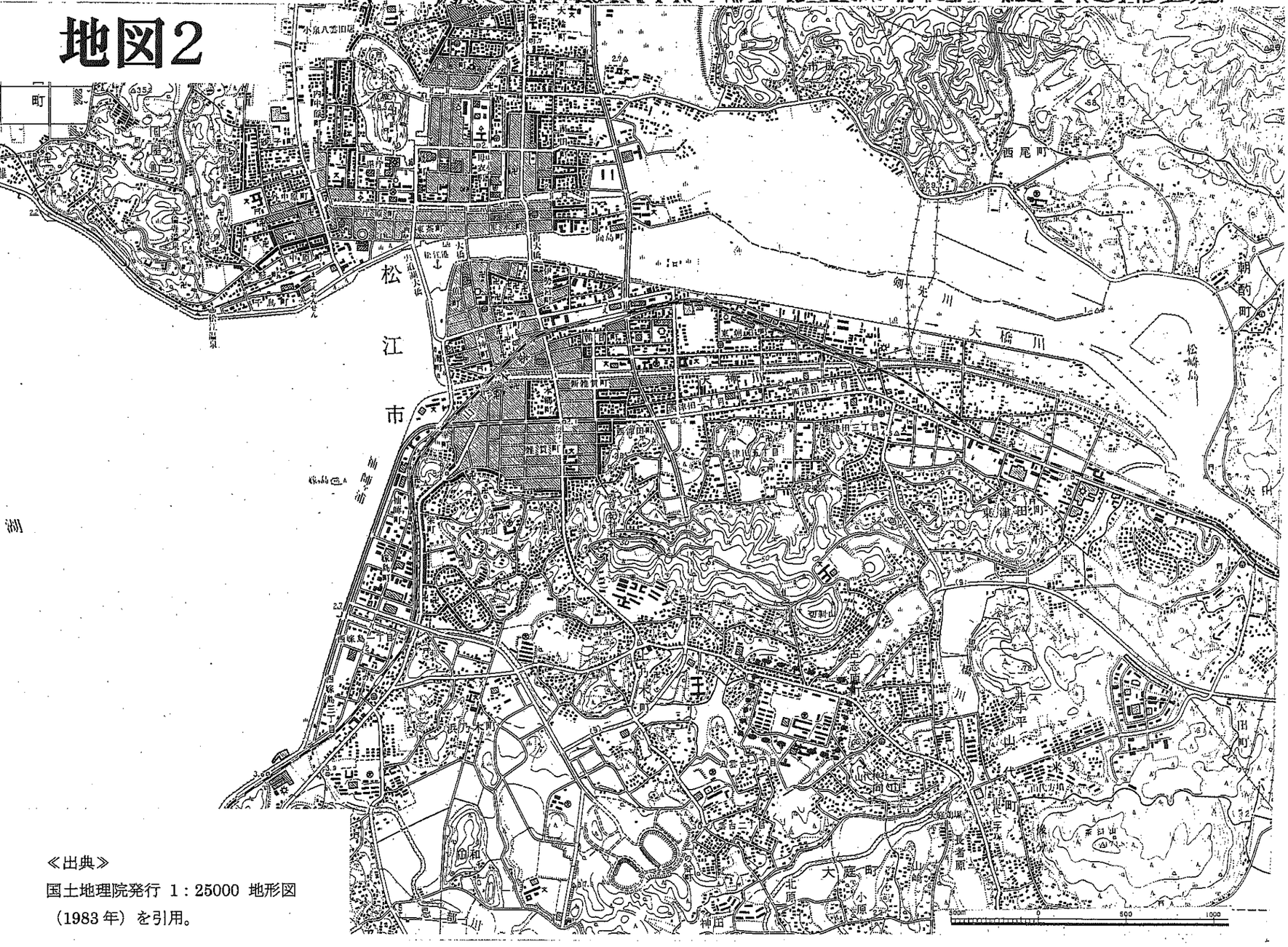
日露戦争は今更私が申上げるまでもなくロシアの東洋侵略政策に対し東洋平和のため帝国が決然起つた戦ひである、当時の国力からしてよくあの大捷を贏ち得たものと思ふ、三月十日は悪戦苦闘ついに奉天□頭高く日章旗を飜へして日露戦役に最後の決を与へた思ひ出深い国民的記念日であるがこの日を迎へる毎に私は戦は「撃ちてし止まむ」の攻撃精神と困苦欠乏に耐へる忍耐力に支配されることを痛感する、今次の大東亜戦争でも卓絶した攻撃精神が敵の大軍を殲滅した事例は枚挙にいとまがないソロモン群島のガダルカナルやニューギニア島方面での皇軍精神の賜でこれがなかつたとしたらその結果は思ひ半にすぎるものがある……（中略）……結局問題は彼我の精神、戦争意識の強弱に帰結する、われわれ銃後の生産県にあるものはすべてガダルカナルを思ひ、ニューギニアを想起すべきである、わが陸海空軍のあの困苦欠乏に耐へての死闘と敵の暴虐ぶりを考へれば「撃ちてし止まむ」の闘魂がひとりでに湧き起る　（『島根新聞』1943年3月10日）

地図1



≪出典≫
古地図研究会発行『明治大正日本の五万分の一地図集成Ⅳ』（学生社、1983年）所収の地図を引用・拡大・加筆。原図は大日本帝国陸地測量部発行の五万分の一地形図「松江16号」（1899年測図、1901年製版、1909 年陸軍建物用地及鉄道修正、1911年改版）。

地図2



≪出典≫
国土地理院発行 1：25000 地形図（1983年）を引用。